

抑うつ状態により意思伝達装置導入に消極的な ALS 患者に対する段階的アプローチ

一場弘行¹⁾, 児玉悦志¹⁾, 菊地豊¹⁾, 美原盤²⁾

1) 脳血管研究所美原記念病院 神経難病リハビリテーション科

2) 脳血管研究所美原記念病院 神経内科

【はじめに】筋萎縮性側索硬化症(ALS)患者において意思伝達装置 (electronic communication device:ECD) の導入は意思疎通手段を確保する上で重要である。しかし、急速な病態進行による身体機能低下や心理的問題により導入が困難となる場合も少なくない。今回、急速な病態進行により強よく抑うつを示し、ECD 導入に消極的であった ALS 症例を経験した。ECD [商品名: 話想 S. R. D 社製] 導入に際し、Model of Human Occupation Screening Tool (MOHOST) を用いてプログラムした作業療法により、円滑な ECD 導入が可能となったので報告する。なお、報告にあたっては脳血管研究所個人情報保護規程に則り、説明の上署名による同意を得た。

【症例の作業評価】症例は 60 歳代前半の女性。診断は ALS。X 年に右上肢の筋力低下により発症。X +10 ヶ月で確定診断。X+1 年 8 ヶ月には歩行困難、食事は全介助となった。ケアスタッフ、主介護者により ECD の使用を勧めたが、「先のことは考えたくない」と導入に著しく消極的であった。ALS Functional rating scale-revised26/48 点。病前の趣味は卓球で、パソコンの使用経験は無く、発症後は友人とも疎遠になった。スイッチ操作はエアバックスイッチによる入力が可能、ECD 操作における理解力は問題なかった。Quality of life(QOL)評価である Schedule for the Evaluation of Individual QOL Direct Weighting (SEIQoL-DW) は、病気や症状のキューが挙げられ、「今は病気のことしか考えられない」と述べた。抑うつ状態の評価である Center for epidemiologic studies depression scale (CES-D) は 44/60 点と強い抑うつ状態を呈していた。

【作業療法介入と結果】症例の ECD 導入における消極的な姿勢は、心理的要因が強く影響していると考え、ECD 操作に対する心理的影響を MOHOST にて評価した。MOHOST の評価により操作能力に対する自己評価の低下を認めたため、難易度と目標を多段階に設定し、進捗のフィードバックを頻回に行い自己効力感の向上を図った。また、対人交流の低下を認めたため、ECD による手紙の作成を目標に、日記の作成を提案し、長文入力や文章レイアウト調整練習を通じて、手紙の作成への応用的な操作を練習した。結果、導入時には 5 文字の入力に 30 分要していたが、3 ヶ月後には 50 文字の入力が 1 時間で可能となり、6 ヶ月後には A4 一枚分の手紙を作成し友人との文通を始めた。MOHOST は操作能力の自己評価の向上、対人交流の改善が認められた。また、卓球の動画や孫の写真を楽しむようになった。ALSFRS-R は 17/48 点と低下したが、SEIQoL-DW では「ECD」「家族」がキューとしてあがった。CES-D は 22/60 点と抑うつ状態の軽減を示し、「うつ気分」「ポジティブ感情」の下の項目で改善を示した。生活場面において、車いす上での ECD による手紙の作成、メール交換に時間を費やすようになった。

【考察】ECD 導入時の症例は、SEIQoL-DW のキューで示されたように病気の進行にのみ注意が向いている状態であった。このような状況下で ECD 導入は症例にとって病態の進行による機能低下と捉えていたと推測され、導入に対し消極的な姿勢を示したものと考えられた。作業療法介入では、病前の社会的な性格を考慮し、本人にとって意味づけの容易な訓練や使用方法を検討し、複数の難易度を設け段階的なアプローチを実施した。結果、操作能力の自己評価の改善や対人交流の再会へと至り、円滑に導入することが可能であった。MOHOST は心理的問題を抱える ALS 患者において、心理的側面に配慮した作業療法をプログラムする上で有用であると思われた。